# 『夢に向かって』

宮城県
あらた道場
中学３年生　　伊　藤　泰　仁

「負けた。」その瞬間、何とも言えない感情がこみ上げてきました。目が熱くなって、視界がぼやける中、僕はなんとか相手を見ながら蹲踞し、礼をしました。

県中総体、僕は準々決勝で敗れました。前日の団体戦で、勝った相手に負けたのです。

帰宅してからも自分の部屋で、

「あの時、なんで足が止まってしまったのだろう。」

と、何度も何度も自分に問いかけました。これまでの僕は、道場連盟の個人戦で優勝してから、ずっと全国大会に行くことを目標に稽古してきました。道場での週４日の稽古では、後輩の面倒を見ながら、技の練習や自稽古など懸命に取り組んできました。しかし、僕は負けたのです。その瞬間全国大会への夢が遠ざかっていったのです。

僕の将来の夢は、父のように、社会に貢献することです。父は中学校の教員で、剣道部の顧問として指導をしています。生れた時から竹刀の音や大きな気合いを耳にしてきました。だから、僕は気付くと自然と剣道を始めていたのです。父が指導している姿もずっと見て育ってきました。稽古の時はとても厳しく、自分の父であっても、

「なんて怖い人なんだろう。」

と、思いました。しかし、稽古終了後は中学生と一緒に笑ったり、遊んだりしている父の姿を見ると、不思議な気持ちになることがありました。その姿から、父はみんなに慕われているのだと気付き、尊敬の念が生れたのです。

道場の先輩には、警察官や教員、会社員となっても剣道を続けている方々がたくさんいます。年に数回だけですが、先輩方の胸を借りることがあります。試行錯誤しながら打ち込みますが、一本を取ることはできません。稽古を終え、先輩方にあいさつに行くと必ず指導をしていただけます。その時、僕は次の稽古では、指導していただいたことを必ずできるようになって臨もうという気持ちになります。

僕が県中総体で負けた時、父も先輩方も励ましてくれました。

「試合の中での決めが足りない。」

「足を止めることは、命取りなんだ。」

それは、決して優しく慰めてくれる言葉ではありません。しかし、僕はその言葉を素直に聞き入れました。師範が、

「もう失うものはないんだから。」

と言ってくださった時、やっと自分の愚かさに気付きました。そして、ふっと気持ちがなぜか軽くなりました。なぜなら、僕は勝つことに執着しすぎていたことに気付いたからです。大事なのは、いつも、その時を大事にし、自分の力を出し切り、相手を尊重して自分の一本を取れる剣道をすること。今度は、それが僕の目標となりました。

そして、東北大会。僕は、師範の言葉、父や先輩方の言葉を思い出し、自分の目標が達成できるようにという思いで臨みました。戦っている最中、僕の心の中にあったのは、培ってきたことを全て出し切ろうという思いだけでした。そして一試合一試合を大事にしながら勝ち進み今度は、優勝するこ

とができたのです。僕の目標がはっきりとしたあの瞬間があったからこそ優勝できたのだと思います。
だから、今、僕はたくさんの言葉をくれた方々へ、
「ありがとうございます。」
と大きな声で言いたいです。

東北大会を終えた今、僕は剣道を通して培った精神力と人との繋がりを大事にし、社会のために貢献できる大人になるという夢に向かって、これからも真っすぐ剣道に向きあって、努力していきます。